

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2016 年 3 月 31 日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第 17 号

京都・東九条と在日コリアン



東九条の歴史と現状を学ぶ

に厳しいものでした。しかしその一方で差別をなくし、共に生きていくための地域でのさまざまな取り組みが進められてきた地域でもあり、その経験がいまもまちづくりの大切な基盤となっているといえます。

このセミナーは戦後 70 年をむかえた今日でも京都朝鮮初級学校襲撃事件をはじめとする深刻なヘイトスピーチが繰り返されるなか、東九条の経験をあらためて振り返り、それを多くの人たちと共有することで、今後のまちづくりに活かそうと企画されました。

当日会場となった京都市地域・多文化交流ネットワークサロンには、研究者、市民、学生など多様な人々が 80 人以上参加してくださいました。

セミナーでは、東九条まちづくりサポートセンター事務局長の村木美都子さんから「東九条『40 番地』と在日コリアン」、京都・東九条 CAN フォーラム代表の朴実さんから「東九条マダンのとりくみとその意義」、京都市地域・多文化交流ネットワークサロン館長の前川修さんから「被差別部落と在日コリアン」と、それぞれ 40 分ほどの報告がおこなわれました。

報告を通じて、①在日コリアン集住地域が形成されてきた過程と差別の実態、②まちづくりの成果としての東松ノ木団地、③高齢、独居、障がい者など多様な人々への対応、④在日コリアンの文化運動としての東九条マダンの歴史、⑤共生社会にむけた東九条マダンの理念、⑥被差別部落との関わりと複合差別の実態、⑦コリアンだけではなく、多様な人々の共生がテーマ

になる東九条、などさまざまな観点からの論点が深められました。

参加者のなかには東九条についてはじめて学ぶ人たちも少なくなく、今後のまちづくりに向けてのつながりを広げられるきっかけになりました。

そしてなによりも、このセミナーを通じて東九条が在日コリアンだけではなく、さまざまな厳しい状況にある「社会的弱者」を受け入れる、「人にやさしいまち」であることを願う人たちの思いが共有できたのではないかと思います。

（郭^{カク} 辰雄^{チヌン} 特定非営利活動法人コリア NGO センター）

2015 年度 第2回料理教室「外国籍市民の方々と学ぶ日本のお弁当」

Let's make Obento and eat together!!



2015 年 12 月 12 日（土）、前回（6 月 13 日）の好評を受けて本年度 2 回目の外国籍市民向けお弁当教室を開催しました。

子どもの食生活を大切に考え、お昼ご飯となるお弁当も、バランスのとれた栄養のあるものを食べて欲しいという思いから、今回は高齢者総合福祉施設「東九条のぞみの園」管理栄養士の山岡舞由さんに

講師をお願いしました。ご自身も保育園に通う子供さんがおられ、お弁当を作る機会が多い現役ママさんです。参加されたのは、フィリピン人のママが 4 名と小学生 1 名、フィリピン人のシスター 2 名。東九条のぞみの園の施設長さんも来られて、とっても賑やかでした。

おにぎりを作るのは初めて、玉子焼きの四角いフライパンも初めて、という方もおられ、ラップを使って一口サイズのおにぎりを作ったり、菜箸を使って、四苦八苦しなごだし巻き卵を焼いたりしました。

ご飯：野菜：肉や魚は、3：2：1 の割合でお弁当に詰めるのが良いそうです。**赤**（ブチトマト・ハム）**黄**（卵・チーズ）**緑**（やさい）**黒**（のり・ひじき）**白**（ご飯）の 5 色がそれぞれ入っていると栄養バランスも良く、美味しそうでした。

おかずは素手で触らないこと、火をきちんと通すこと、しっかり冷めてから蓋をすることなども教わりました。玉子焼きは甘く仕上がり、トマトの葉っぱは取って、傷まないようにしました。

また、それぞれ一口大にして、お箸でつまみやすくするなど、食べやすさにも気をつけて作りました。お母さんの手料理を美味しく楽しく食べてほしいという、一番の願いが伝えられますように。。



2015 年度 第 1 回東九条を知る学習会

なにがおきたの？ ヘイトスピーチ

～民族差別を許さない東九条～

2015 年 11 月 27 日（金）、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンにて、2015 年度第 1 回東九条を知る学習会「なにがおきたの？ ヘイトスピーチ ～民族差別をゆるさない東九条～」が開催されました。この学習会は、2009 年から 2010 年にかけて当時京都市南区上鳥羽にあった京都朝鮮第一初級学校に対して行われたヘイトスピーチ（朝鮮学校襲撃事件）に関わって、事件の背景や被害の実像を知り、在日コリアンが多く集住し多文化共生をめざす東九条において、差別を乗り越えヘイトスピーチを許さないために何ができるのかを考えるために企画したものです。

当日は朝鮮学校襲撃事件裁判弁護団の上瀧浩子さんと元京都朝鮮第一初級学校保護者の朴貞任^{パクジョンイン}さんを報告者に、〈朝鮮学校と民族教育の発展をめざす会・京滋〉のさとう大さんをコーディネーターにお迎えし、ヘイトスピーチをめぐる様々な課題についてお話を伺いました。

「朝鮮学校の事件の傷跡」と題された上瀧さんのお話では、襲撃を人種差別と認定した最高裁判所判決の意義と限界とともに、裁判からは取りこぼされてしまった、ヘイトスピーチがもたらした子どもたちへの深刻な被害や、差別に対し声を挙げるができなかった地域社会の問題などに触れられ、差別が生じたときに被害者を支援する人たちが可視化されることの大切さを強調されました。

また、襲撃事件当時、ご自身のお子さんが同校に通う生徒だった朴貞任さんからは、差別に直面し心に深い傷を受けた子どもたちの様子や、保護者としての葛藤や苦悩、日本社会への不安、被害からの回復の途上にある子どもたちへの思いなどをお話いただきました。

今回の学習会では、ヘイトスピーチはそのメッセージ性ゆえに深刻な被害をもたらすことが指摘されました。襲撃事件の判決は出ましたが、今現在でも公の場やインターネット上でのヘイトスピーチは決して無くなっておらず、被害は未だ続いている状態にあります。そのようななかで私たちはヘイトスピーチとどのように向き合わなくてはならないのか、厳しく問われていると感じました。



ヘイトスピーチと向き合うために



立命館大学産業社会学部 × 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

東九条での社会調査に参加して

東九条地域では 2013 年度より立命館大学産業社会学部の皆さんが、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンと登録団体の協力の下、多文化共生をテーマに社会調査をおこなってきました。今回は、登録団体の日本自立生活センターや東九条マダンに関わりながら調査を実施された松島理菜さんに、調査を終えての思いを寄せていただきました。（本号 6 頁もあわせてご覧ください）



東九条マダンのステージで演奏する松島さん（右端）

「そもそもみんなの中での障害者の基準は何？」初めて日本自立生活センター（JCIL）の事務所に伺わせていただいた時のことは忘れられません。メンバーと事前に打ち合わせをしていたのですが、代表の矢吹文敏さんにひょいっとひっくり返されました。JCIL の皆さんと出会って、イベントなどに参加させていただく中で、体の動きに不自由があることが障害なので

はなく、それによって彼らが普通にできるはずの多くのことが制限されていることが障害なのだと気づくことができました。生き生きと活動をする皆さんと関わり始めたことで、自分自身の様々な価値観、モノを捉える感覚が大きく変化したように思います。

そして第 21 回～23 回の東九条マダンでは、サムルのたまご※の皆さんと一緒にステージに上がらせていただきました。初めてマダンに足を運んだ時には、異空間に放り込まれたような感覚がありましたが、今ではチャンゴの音を聞けば体が勝手に動き出すようになりました。たまごのみんなの一生懸命かつ楽しそうな姿に感化され、私自身もとても楽しく練習に取り組み、少しは上達できたかなと思っています。

正直、京都から離れることがこんなに寂しくなるとは思っていませんでした。しかしそれは大学生活の 4 年間で、多くの素敵な方々と出会うことができた何よりの証であり、とても嬉しいことだと感じています。東九条でお世話になった皆さまには、改めて感謝申し上げます。大好きな東九条で、また近いうちにお会いしましょう！

（松島 理菜 立命館大学産業社会学部 4 回生）

※サムルのたまご：東九条地域で育った個性豊かな子どもたちがサムルノリ（朝鮮半島の民俗音楽に由来する打楽器合奏）を演奏するグループ。

〈シリーズ〉登録団体との連携・紹介 (17)

渡日帰国青少年（児童生徒）のための京都連絡会

ネットワークサロンの登録団体「渡日帰国青少年（児童生徒）のための京都連絡会（略称：ときめき）」は、外国にルーツをもつ生徒で、日本語を母語としない生徒に関わる個人や団体がお互いの実践や課題を共有し合うためのネットワークです。今回は 2015 年 12 月 5 日（土）に京都市地域・多文化交流ネットワークサロンで開催された「多文化共生 ときめき☆講座 高校『卒業』のもつ重要性 ～渡日生徒のセーフティネットとしての進路選択～ 定時制高校はどんなところ？」の模様をご報告いただきました。

夜間定時制高校の簡略な歴史と現状について、そして夜間定時制卒業生と 4 人のパネラーで順に報告し、その後質疑応答があった。

夜間定時制高校は常に時代を映す鏡であり、教育のセーフティーネットの役割を果たしてきた。と同時に「働きながら学ぶ」という基本を崩さず、自立して生活することの基本を学ぶことを大事にしてきた。すでに成人の人には学び直しの機会と場を提供してきた。卒業後は高等学校卒業という日本の社会で生活するには重要な資格を獲得できる場として機能している。

現在、現代的な課題として、不登校経験者や学習障害を持つ生徒、ニューカマー生徒の学びの場として機能している。4 年で卒業するコースと 3 年で卒業するコースがある。

各教科できるだけ各生徒の特性に合わせて授業の進度をゆっくりしながら、本質を外さない授業を心がけている。同時に自立に必要な、働いて収入を得るという経験を身に着けさせるためにアルバイト就労を勧めている。また自主活動では部活動で全国大会出場を目標に（全日制より出やすい）自信と自尊心を育てることを心がけている。中には全日制では禁止されている、バイク操作の全国大会で好成績を収めている学校もある。上級生には、できるだけ在学中にとれる、自動車の運転などの資格をとって就職に備えるよう勧めている。また短大・専門学校・4 年制大学へ進学する生徒もいる。

ニューカマー生徒に対しては、日本語の未熟さで全日制へいけなくても定時制でゆっくり日本社会になじみながら、日本語を習得して卒業後の進路に備えるという生徒もいる。学校によっては中国生まれの教員がいて、授業、生活のサポートをしているところもある。

しかし、卒業できるのは入学生の約半数である。常に自分自身との闘いなのである。

（内田 順子 京都府立定時制高校教員）



外国にルーツをもつ生徒にとっての意義も指摘

〈サロンへのメッセージ〉

学生たちを惹きつける、東九条の魅力



学生たちによる研究成果の報告会

東九条地域を学生たちとともに訪れるようになったのは、私が立命館大学産業社会学部で教員になった翌年の 2011 年のことです。当初は単発での街歩きなどが中心でしたが、2013 年には社会調査士課程のプログラムで、2 回生の学生たちがさまざまな団体にボランティアとして関わり、1 年間かけて東九条地域の多文化共生のあり方を調査しました。東九条地域がこれまでの歴史のなかで築き上げてきた知恵と文化に触

れ、多くの方々の優しさに助けられて、学生たちは東九条地域の魅力に引き込まれていき、最終的には報告書をまとめることができました。

授業が終わったあとも、一部の学生たちは自主的に児童館や地域の団体に通い続け、希望の家で行われる春まつりやバザーなどのイベントなどにお手伝いに行くことが続きました。そしてその学生たちが 4 回生になるとき、自分たちが卒業したあとでも地域で活動する後輩を育てたいと声があがり、2015 年度には、新しく加わった学生たちも交えて、東九条マダンに関わりながら、ふたたび東九条地域を調査するという授業を担当しました。学生たちは、プンムル班や美術班、情宣班などでお世話になりながら、東九条地域で学んだことを、卒業論文やレポート、ドキュメンタリーなどの形でまとめました。

1 月 30 日には、その成果を報告する会を多文化交流ネットワークサロンで開催しました。これまでを思い出して感極まる学生たちもあり、40 名以上集まってくださった方々からは多数の心温まるコメントをいただきました。学生たちは東九条地域で、学ぶべきテーマや温かい人々、そして切磋琢磨しあえる仲間たちと本当に幸福な出会いをしました。そんな若い時期の経験は、彼らが将来の方向性を決め、それぞれの道を切り拓いていくときに、大きな糧になることと思います。東九条地域で学んだことを胸に、社会に羽ばたいていってくれること、そしてまた何かの形で東九条地域に帰ってきてくれることを願っています。

(丸山 里美 立命館大学産業社会学部准教授)

□ 所在地: 〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31 (京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内)

□ TEL: 075-671-0108 □ FAX: 075-691-7471 □ E-Mail: salon_kyoto@ck9.so-net.ne.jp

□ 開館時間: 9 時～17 時 □ WEB サイト: <http://k-tabunka.com>

□ JR 京都駅・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町より徒歩 10 分／84 系統 河原町八条より徒歩 5 分